

令和6年度12月全校集会 校長挨拶

令和6年12月23日（月）

皆さん、こんにちは。

明日から冬休みに入ります。

生徒の皆さんには、年末に今年1年を振り返り、新しい年を希望を持って迎えてもらいたいと思っています。

12月12日（木）の昼休みに、水害を想定した避難訓練を行いました。訓練の後、私は「正常性バイアス」の話をしましたが、具体的にどんな話だったか皆さんは覚えていますか。どんなことに対しても、「たいしたことではない」とか「たぶん大丈夫」といった感覚に陥りやすいことへの注意を促すのとあわせて、危険が迫っていることを察知したり、事故等を未然に防ぐ意識と行動をとったりすることが大事だとお伝えしたつもりでした。

しかし、その日の放課後、教室のストーブの取扱いが適切でなかったことによる事故が起こりました。幸い、大事には至りませんでした。私はこのような出来事を些細なこととして終わらせてはいけないと考えています。

ハインリッヒの法則というのを知っているでしょうか。1つの大事故の裏には29個の中程度の事故が潜み、その裏には300個の小さなミスが潜んでいるというものです。今回の事故を、「大事に至らなくてよかった」という軽い考えで片づけてしまっては、いずれ大事故が起こる危険性は残ったままということになります。

個人でも、学校のような組織でも、リスクマネジメントはとても重要です。では、私たちがリスクマネジメントをする必要があるのは、どういう理由からでしょうか。

世間から批判されないようにするため、でしょうか、それとも、個人や組織の評価を落とさないようにするためでしょうか。私は、個人や組織に属する人たちの安心や幸福を担保するためにリスクマネジメントをするのだと考えています。

「叱られるから（注意されるから、決まりで定められているから）ちゃんとする」という受け身的な姿勢ではなく、「みんなが幸せであるために、普段から適切な対応をする」という対応をお願いします。

ここまでお話ししたことを、「一般化」と「個別化」という観点から考えてみたいと思います。

皆さんは、水害に関する私の話を聞いたとき、どのように受け止めたでしょうか。

もし、皆さんが、私の話を水害が発生した場合の留意点としてのみ受け止めたならば、皆さんは「個別」の世界でだけ理解したということになります。

火事やその他の災害、さらに言えば、災害に限らず様々な場面や事柄にも当てはまることとして聞いてくれた人は、個別の話としてではなく、すべてのことに当てはまる考え方、すなわち一般的な原理・原則として捉えたということになります。

皆さんには、どちらか一方にのみ偏ることなく、個別と一般の間を往還する思考を持って、物事にあたってほしいと思っています。

学びを例に挙げるならば、各教科の学習やその他の場面における一つの学びに着実に取り組むという具体的な活動に力を注ぐのに加えて、「なぜ学ぶのか」「何のために学ぶのか」「今の学びを将来にどう活かすといいか」といった本質的な問いに対する答えを探る思考をすることの両方が大事ということになるのだと思います。

ところで、苫野一徳先生（熊本大学大学院准教授 哲学者、教育学者）という方が、何人かの小・中学生と「学びとは何か」という哲学対話を行ったところ、「学びとは、自分自身の問いと気づきを通して、生が豊かになっていく営みである。」という考えにたどり着いたと、ある本で読みました。

皆さんも、「学びとは何か」「幸せとは何か」「よい社会とは何か」など、時には本質的な問いについて思いを巡らせてみてはどうでしょうか。そこで得た考えを、日常の様々な出来事に落とし込んでみると、これまでの当たり前前の日常に新しい側面を見いだすことができるかもしれません。

以上、個別と一般、具体と抽象の間を行き来することについてお話ししました。

それでは、明日からの冬休みを充実した期間としてくれることを期待して、年末の挨拶を終わります。